

当報告の内容は、報告者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「『アルタイ型』言語に関する類型的研究」

(2017年度第2回（通算第8回）研究会)

Title: Typological Study on “Altaic-type” Languages (The 8th meeting)

日時：2017年12月3日（日）

Date/Time: 3rd Dec. 2017

場所：AA 研マルチメディア会議室 (304)

Venue: Room 304 (Multimedia Conference Room), ILCAA

Language: Japanese

1. 風間伸次郎（AA 研共同研究員，東京外国語大学）

「アルタイ諸言語と朝鮮語，日本語におけるいわゆる「再帰代名詞」の対照研究」

（要旨）本発表では表題における5つの言語を一括して指す場合に、「対象諸言語」と呼ぶことにした。結論としては、次のように本稿の対象諸言語の再帰代名詞ならびにそれと内的関連を持つ諸特徴を分析・整理した。すなわち、本発表の対象諸言語と、ヨーロッパの印欧諸語の多くとの違いは次のような点にある。ヨーロッパの印欧諸語の多くには SVO 語順・他動詞優勢・自動化型という特性があり、このため再帰代名詞は強く文法化しており、動詞の態と深く関わっている。態は動詞複合体のもっとも語幹寄りに現れる文法カテゴリーであり、このためにその再帰代名詞は節を越えることが不可能で、斜格名詞に支配されることもできない。歴史的にもロシア語における *sja* 動詞にみられるように、動詞に取り込まれていく過程をたどる。これに対し、本発表の対象諸言語においては、SOV 語順で他動詞は優勢でなく、再帰代名詞は文法化しない。いわゆる **Pro-drop** で主語の現れない文も多く、所有などでは与格主語構文も用いられる。このため再帰代名詞は視点や主題によって束縛され、斜格名詞によって束縛されたり、節や文を越えて束縛され得る。これによってその機能はただの人称代名詞に近づき、再度語彙化して人称代名詞化することも起こる。このように多くの特徴がそれぞれの言語群で内的関連のある特徴の束をなしているが、再帰代名詞を中心に考えてごく簡単にまとめるならば、長距離束縛の可不可が両言語群における再帰代名詞の性格をもっとも大きく左右していると言うことができる。

## 2. 山越康裕 (AA研)

### 「モンゴル諸語における非定形動詞の定形用法」

(要旨) 本発表ではモンゴル諸語の非定形動詞, すなわち分詞・副動詞が主節述語として用いられるその傾向が言語ごとに異なること, それが下表のように現在の分布地域によってグラデーションをなしていることを指摘した。

表. モンゴル諸語における非定形動詞の定形用法の分布

	分詞文末用法	認識モダリティの対立	条件副動詞の文末用法
広義の モンゴル語	<i>Dag.</i>	○	?
	<i>Bur.</i>	○	分詞 vs. 分詞+NMLZ
	<i>Kham.</i>	○	分詞 vs. 分詞+NMLZ
	<i>Khal.</i>	○	?
	<i>Khor.</i>	条件・疑問・否定文	定形 vs. 分詞
	<i>Oir.</i>	条件・疑問・否定文	定形 vs. 分詞
	<i>Mid.Mon.</i>	条件・疑問・否定文	定形 vs. 分詞
河湟語	<i>Sh.Y.</i>	条件文	◎依頼
	<i>Dxn.</i>	×	◎願望
	<i>Kan.</i>	×	CONJ vs. DISJ
	<i>Bon.</i>	×/○?	CONJ vs. DISJ
	<i>Man.</i>	×	CONJ vs. DISJ
	<i>Mng.</i>	×	CONJ vs. DISJ

とくに分詞に関して注目すると, 中期モンゴル語と同じような分詞の主節述語用法を保持しているのはオイラト語・ホルチン方言, それよりも北に分布する諸言語では主節述語用法が拡張しており, それよりも南では主節述語用法が(ほとんど)ない, とまとめられる。分詞の主節述語用法がない点と主節述語で *conjunct/dusjunct* の対立があるという点は, ある程度相関関係があると推測される。また, 広義の「モンゴル語」とくくられる言語群のなかでも差異がみられる原因についても今後考察すべき点といえる。

以上の結果を踏まえて, このようないわゆる非定形とされている形式が主節述語として広範に用いられるようになった場合には, なにをもって「定形」とするのか, またなにをもって「文末」が決まるのかという点がアルタイ諸語を記述する上での問題となることを指摘した。

### 3. 児倉徳和 (AA研)

#### 「シベ語・満洲語の名詞化要素 *ngge* の機能変化」

(要旨) シベ語と満洲語には名詞化の機能をもつとされる *ngge* という形式が存在するが、シベ語と満洲語の動詞の活用形 (特に形動詞) は直接格をとる点で本来的に名詞的な性質を持っていることから、*ngge* の機能は品詞の転換という意味での名詞化であるとは考えられない。このことを踏まえ、本発表では、*ngge* と形動詞による名詞化について、まず意味機能の差異を論じた上で、その差異を基に両者の統語的特徴について考察した。そして、*ngge* は存在物を表す場合も、事態を表す場合も、談話において既に導入済み、あるいは談話以前に導入されていた要素 (存在物および事態) を指示する機能を持つのに対し、形動詞は談話において導入済みの存在物および事態を指示する機能を持たず、専ら談話に新たに導入される事態を表すという意味機能の違いが存在すること、*ngge* はどのような統語的環境に現れても常に単独で指示の機能を持つこと、*ngge* を主要部とする名詞句や名詞節が主格または対格しかとらないのは、談話において斜格の名詞句や名詞節が専ら時や場所を表し、存在物および事態を指示する *ngge* の機能と相容れないためである、という3つの点を指摘した。

報告者の報告後、成果公開および『FIELDPLUS』特集についてメンバー内で相談した。

文責：山越康裕